

琥珀い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

若者との共創で新たな価値を生み出す

110
2024 July

課外活動や少人数グループワークを通

問題解決に関する思考力や協働学習等

こうした中、地域社会の発展へ貢献

共創」がもたらす
それぞれのメリット

大学の社会貢献へ向けて
広がりを見せるPBL教育

近年、学生と地域・企業が「共創」

「P」にはProblemとProjectの二つの

ける地域貢献・社会貢献の重要性の高

れ助成金を受けられるため、この支援

POINT OF VIEW
視点

地域の未来づくりの大きな力となる
若者世代の視点と発想
佐々木公之
中国学園大学 国際教養学部国際教養学科教授 学生部長

profile

佐々木 公之
<ささき・きみゆき>



特集
若者との共創で新たな価値を生み出す



p.3



p.8



p.12



p.17



p.20



p.24



p.26

碧い風
あおいかぜ

きらめきの地域デザイン

110

2024 July

CONTENTS

- 14 地域に生きる企業家群像 ⑩ 有限会社小川商店 代表取締役 小川知興 (鳥根県大田市)
- 17 キラリ、輝く元気企業 ⑧ 株式会社フジタ (鳥取県若美町)
- 20 夢紡人/ゆめつむぎびと ⑩ 大イノコ祭りを支える市民の会 副会長 石原悠一 (広島市)
- 23 この名酒にこの一品 ③ いなば鶴 純米大吟醸 強力 ハタハタの塩焼きとしやぶしやぶ (鳥取市)
- 24 伝統芸能を継ぐ人びと ⑪ 横仙歌舞伎 (岡山県奈義町)
- 26 オンラインワンのご当地ミュージアム ③ 日本ハワイ移民資料館 (山口県周防大島町)
- 28 山をあるく ⑫ 日名倉山 (岡山県・兵庫県)

表紙写真/さざ波状の風紋が現れた早朝の鳥取砂丘 (鳥取市)

表紙写真提供/水本 俊也

目次写真提供/中国学園大学、菅公学生服株式会社、倉恒 弘美、山田 真実、大イノコ祭りを支える市民の会、横仙歌舞伎保存会

デザイン/有限会社シフト

*本誌は再生紙を使用しています

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。

- 3 | 視点 | 地域の未来づくりの大きな力となる若者世代の視点と発想 佐々木公之 (中国学園大学 国際教養学部国際教養学科教授 学生部長)
- 6 伝統織物「紙布」に新たな命を吹き込み日常で使える商品を開発 安田女子大学 (広島市)
- 8 生徒とのモノづくりを通じたキャリア教育支援と地域活性化 菅公学生服株式会社 (岡山市)
- 10 デジタル技術を生かし、学生との共創で地域課題を解決 デジテック for YAMAGUCHI (山口県)
- 12 温かく包まれる居場所を地域に創出 多世代間交流を促し、人のつながりを育む 地域食堂「COCON」 (鳥取市)

特集
若者との共創で新たな価値を生み出す



佐々木ゼミがYouTubeに公開する「岡山市魅力不思議探検隊チャンネル」では岡山後楽園と岡山城を紹介する各動画の8カ国語バージョンを作成。2023年にはこの動画の二次元コードが付いたチラシがJR岡山駅などで配布され、観光振興に役立てられた。



PR動画を8カ国語で制作

2021年度から2022年度にか

に「食」の定額制（サブスクリプション）サービスを考案した（図）。久米南町農産物の季節ごとの宅配と久米南町での田植え・稲刈り・野菜の収穫などの農業体験、道の駅での食事を組み合わせ、年間を通じて久米南町のさまざまな味と体験を定額制で提供する内容である。この構想は国の「地方創生☆政策アイデアコンテスト2023」官民連携の部で地方創生担当大臣賞を受賞し、2024年度は久米南町の農家や町役場、中国学園大学の産学連携で実施に向けた検討を進めていく予定だ。

けては、動画共有サイトYouTubeを活用して岡山市と周辺地域の魅力を発信する活動を行った。コロナ禍で観光客が激減し、経済が停滞した岡山市の活性化を目的に、YouTubeに「岡山市魅力不思議探検隊チャンネル」を立ち上げ、岡山市の穴場の観光スポットの紹介や地元グルメの実食ルポなどの動画を投稿。学生の視点と感性で次々にアイデアを出し合い、スマートフォンで手軽に撮影して制作した投稿動画は半年間で30本を数えた。

さらに、大学や専門学校で留学生の協力を得て、多言語（中国、フランス、ミャンマーなど8カ国語）で岡山城と岡山後楽園のPR動画計16本を撮影して投稿。この取り組みは岡山市の令和

また、課題解決学習や実践の場は大学だけでなくさらに若年層にも広がりを見せており、高等学校で講義を行う機会も増えてきている。また、即戦力となるエンジニアを育てる高等専門学校においても、その高い技術力を地域課題の解決に生かす試みが出てきて

※1 出典：溝上慎一、成田秀夫著「アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習」（東信堂、2016年）
 ※2 文部科学省中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」（第1章）、平成17年1月28日
 ※3 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」、平成23年1月31日

図 佐々木ゼミが考案した久米南町の基幹産業（農業）を生かす地域活性化のアイデア



佐々木ゼミが久米南町のために考案したこの構想は「地方創生☆政策アイデアコンテスト2023」の官民連携の部において地方創生担当大臣賞を受賞した。2024年度は住民の理解を得て実現へ向けた動きとなる予定だ。

広がる。地域・行政は、地域資源などを外部の視点や若者の視点で再発見したり、課題解決のアイデアを得たりすることが期待できる。また、学生が地域に入ることで住民が元気になる効果も大きい。地域の高齢者が学生と会話をし、人生の先輩として経験や知識を次世代に伝えることは、自己肯定感を高めることにもつながる。そして企業は、働き手の確保やビジネスのアイデアなどにつながる可能性がある。

「共創」の進め方について、私のゼミのPBLを例に挙げると、現地とのコミュニケーションのため学生が何度も足を運ぶことを考え、対象地域は県外や遠方ではなく、県内の自治体をフィールドにしてきた。具体的な対象地の選定においては、「自分の出身地の活性化を図りたい」などのゼミ生の問題意識に発することが少なくない。

プロジェクトに関わる人数は、取り組みの効果を高めるため、権限を与えられたリーダーが意見をまとめやすい少人数グループで活動するようにしている。また、活動内容は、大枠は私と行政、地域で協議して決めるが、具体的な活動は学生主体でアイデアを出し合いながら進めている。

「食」の定額制サービスを考案

最近のPBLでは、2020年度から岡山県久米南町下榎地区で地域活性化をテーマに取り組んだ。同町出身の学生による「かつて祖父が暮らした、現在限界集落に認定されている下榎地区を元気にしたい」との提案から始まり、高齢化率が岡山県内で最も高い久米南町（2020年時点で44・9％）の課題であった関係人口獲得と若者世代へのPR、地元農産物を活用した新商品開発などを目指した。

2020年度は農業体験をはじめ、SNSによる情報発信、地元ホームセンターとの連携による焼き芋専用ロケットストーブの製作に取り組み、2021年度は孫世代の関係人口獲得に向けた企画と、道の駅での収穫野菜の販売などを行い、2022年度は地区産の小豆を使用した新商品として「カラフルオーガニックぜんざい」を開発し、PRと販売を行った。

その3年間の取り組みを踏まえ、2023年度は、久米南町と地元JANAクラウンプラザホテル岡山などとの協働で、久米南町特産のキュウリと柚子を活用した料理を開発し、レシピ集を作成した。また、久米南町と共

4年度「学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト」でグランプリを受賞した。

地域の人材は地域で養成する

これらで挙げたような、学生と地域の「共創」によって、学生と地域住民の意識が大きく変わっていくことを実感している。

久米南町で活動した学生は、「住民との信頼関係を構築することが何より大切だと感じた」「若い力のおかげで元気がもたらえたと言われたことがうれしかった」「自身の成長につながっていることが実感できた」「主体性が身に付いた」など体験の成果を口にして

おり、地元から学校へ通う生徒が多い大学進学前の年代から地域課題に向き合い、実践する場があることは地域にとっても将来的には有益性が高いといえよう。

中央教育審議会は今後の学校教育・職業教育のあり方について、「地域の人材は地域で養成する」という観点に立ち、地域の企業や関係機関等との密接な連携の下に行われることが不可欠」としている。その意味でPBLは地域人材の養成面で大きな力を秘めており、今後、PBLに取り組んだ地域で起業を志す学生が増えることも十分考えられる。それに伴って、新たなビジネスや価値を創出し、地域課題を解決する若い人材が地域に定着する可能性が高まる。学生や若者世代との「共創」が、地域の未来づくりの推進力となることは間違いないだろう。

伝統織物「紙布」に新たな命を吹き込み 日常で使える商品を開発

安田女子大学〈広島市〉

安田女子大学の学生たちが、江戸時代から伝わる「紙布」で、カップに巻いて繰り返し使える「スリーブ」を開発。現代のニーズにマッチした商品づくりで認知度を高め地域の活性化につなげる試みは、地域の伝統産業に新たな可能性をもたらすと期待されている。

文／川西 由香理

天然素材の紙糸で織り上げる 伝統織物「紙布」

このプロジェクトは、安田女子大学現代ビジネス学部公共経営学科の地域活性化ゼミを指導する講師の山田貴子先生が、広島で若者層の人口流出が続く中、「広島の魅力が学生に知ってほしい」と広島県江田島市に残る伝統織物「紙布」に着目したことに始まる。大学などを対象にした広島市の令和4年度「広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業」の助成を受け、当時の3年生により、「魅力ある特産品の高付加価値化による経済活性化」をテーマに始動した。

紙布とは、天然素材の紙糸で織り上

しだけ配慮している「ライトエコユーザー」を設定した。その後、津島織物の残反から素材を選び、紙布スリーブの製品化に着手。末宗代表のサポートの下、スリーブの形状からバイアステープの色や太さまで、細部にわたる一つひとつを「自分たちの設定したペルソナに合うのはどれか」と考えながら決めていった。そして、気軽に上品に伝統を持ち歩ける、紙布スリーブの試作品がついに完成。自信を持って扱い方を伝えられるよう、その後も保温性や耐久性などを何度も検証した。「試作品のアンケートから、私たちが商品に込めた紙布への思いや価値をお客

特長を生かした、繰り返し使える「紙布スリーブ」だった。カフェでアルバイトをしていた学生によるアイデアで、店舗では紙コップに巻く使い捨ての紙スリーブが使用後に大量に捨てられていたことから発案したという。



写真提供／安田女子大学

プロジェクトを引き継いだ 先輩が製品化へ挑む

プロジェクトは翌年度に引き継がれ、紙布スリーブの製品化は、新たに3年生となる先輩へと託された。ゼミ生の谷崎桃花さん、氏家菜桜さんたちは6人は、初めは紙布の存在すら知らなかったが、紙布に触れる時間が増えるにつれ次第に理解と愛着を深めていったという。

さまざま感じてくれたことが分かりました。ただ、価格が高いという声もありました」と氏家さん。伝統織物としての価値を考え、価格を下げない代わりに、高級感あるパッケージの製作に知恵を絞った。最終的に、依頼したデザイナーの発案で、一目で用途と機能が分かる紙コップ型に決定。中に入れたスリーブと同じ柄の紙布で作ったふたはコースターとして使用可能で、コップの素材や字体などで上質感を演出した。

学生によって広まる 地域の伝統と思い

「いろいろな視点から意見をもらって

商品をよりブラッシュアップしたい」「起業された方々の中で学生である自分たちが通用するのかを試したい」という思いから、2023年度「第7回中国地域女性ビジネスプランコンテストSOERU」に応募し、学生で初となる特別賞受賞という結果を残した。「津島織物の社長が『紙布を広めてくれてありがとう』と直接伝えてくれました。活動を通して伝統産業の素晴らしさと商品開発の工程を知ることができ、成長できた一年でした」と谷崎さんは振り返る。氏家さんは「県内外問わず、紙布が広島の魅力としてどんどん広がるきっかけとなればうれしい。



紙布製の壁紙は通気性、吸放湿性に優れ「呼吸する壁紙」と呼ばれる。写真提供／津島織物製造株式会社



1 商品開発にあたっては打ち合わせや検証を何度も行った
2 G7広島サミット会場に設けられた県内特産品のPRコーナー。山田ゼミの3年生が江田島市の装飾を担当し、紙布製の折り鶴などと共に製作中のスリーブを展示した
3 スリーブ完成後の商品撮影も末宗代表協力の下、学生たちの手で行った

紙布スリーブ

価格：1,980円(税別)
発売日：2024年2月
カラー：6色
重量：約10g
機能：温・冷ドリンクの保温、結露防止、滑り止め
対応サイズ：S～L
販売場所：ZANPUPオンラインショップ 江田島荘(旅館)
<https://www.zanpup.com/onlineshop>



SOERUで特別賞を受賞した2023年度山田ゼミ3年生6人を含む紙布スリーブ製作チーム(後列右から山田先生、氏家さん、谷崎さん、末宗代表)
写真提供／安田女子大学

学校法人安田学園 安田女子大学
広島市安佐南区安東6丁目13番1号
<https://www.yasuda-u.ac.jp/>

にも貴重な力となっている。2024(令和6)年2月末に発売した紙布スリーブの販路拡大は、次年度のプロジェクトとして先輩に引き継がれた。今しかできない、学生時代のチャレンジは、学生だけでなく地域にも貴重な力となっている。

私たちのような体験ができる学生が増えると、広島市の活性化につながると思います」と思いを語った。

今回の受賞は、学生との共創が伝統産業に新たな魅力を創出するというだけでなく、それを先輩に引き継ぐゼミのシステムも評価されたという。

「どこから取り掛かっているのか全く分からず、末宗代表にマーケティングの基礎から教えていただきました」と氏家さんは振り返る。

まず、ターゲットを絞るべく、ペルソナとして30～50代の女性で環境に少

※ ペルソナ…マーケティングにおいて、自社のサービスや商品を利用する典型的な顧客像のことを指す



岡山南高校「MPS」過去の成果物



2



3

- 1 エコロジー×災害対策(19年度)
制服の廃材で、ポンチョや担架などの防災グッズを製作
- 2 セーラーに合うベストパンツコーデ(21年度)
新制服に先駆け導入されたスラックスとベスト、カーディガン
- 3 県産デニムを用いたバスガイドの制服(22年度)
地元デニム企業・株式会社ジャパンブルーと協働。下電観光バス株式会社で実際に導入されている



カンコーではMPSでキャリア教育支援を行いながら、繊維産業が盛んな岡山県のPRにもつなげている
写真提供/菅公学生服株式会社



菅公学生服株式会社
営業課の長尾桐帆さん

菅公学生服株式会社
岡山市北区駅元町15-1 5F
https://kanko-gakuseifuku.co.jp/

ディガンやベストの導入も発案。翌年度に生徒によるプロジェクトチームが結成され、生徒の意見を取り入れながら試作と検討を重ねた結果、ハイウエストのスラックスと男女共通のカーディガン、ベストが2023年度から実際に導入されている。

制服改善の検討はその後も続き、2024年度からは伝統だった学ランを廃止して男女共通のスーツスタイルを採用した。一方、女子に人気のセーラー服も素材や機能性を進化させて継承し、制服をスーツスタイルとセーラースタイルから選択できる県下初の学校となった。さらに夏服には半袖ポロシャツも取り入れ、前年度から先行して導入されたアイテムと合わせる豊富なラインナップとなり、性別に関係なく好きなものを選んで着用できる新たなスタイルの制服として話題となった。

カンコーでMPSを担当する営業課の長尾桐帆さんは、生徒と接することで自分の中にあつた「制服とはこうあるべき」という強い固定観念に気づいたという。「その学校を象徴するものとして品位や落ち着いた印象、保護者が求める機能性を重視してきたのですが、生徒の意見が多かったのは『10代の今しか着られない服を着たい』『青春を感じる』とできる爽やかなデザインにした」というものでした。彼らにとって高校3年間は大切な時間なのです。

今回刷新された制服のカラーリングは、検討当初は濃紺×濃茶だったが「若々しさに欠ける」との意見からワントーン明るい色合いに変更された。また、セーラー服のリボンが無地であるのに対し、「スーツのネクタイに無地はシンプルすぎる」としてストライプ柄

生徒の発想×プロのノウハウ

が採用された。こういったこだわりが随所に生かされている。

「生徒側の意見を聞いて発見もありましたが、一方で、プロとしてのノウハウや知識を持つ企業側の捉え方・考え方も伝えるように気をつけました」と長尾さん。意見を出し合つて検討を重ね、より最適なものを創り出す、というモノづくりの基本を実践するのが、このプロジェクトの意義だと考えている。

企業側のメリットと地域活性化

MPSで連携する企業側としてのメリットの第一は、高いブランディング効果だ。「カンコーは高校生と一緒にモノづくりをしている」「カンコーは学生の意見を聞くのに長けている」というイメージが定着し、他校から相談を持ち掛けられる件数も増えた。また同社のスローガン「夢と学びを応援します」の認知度も飛躍的に上がった。

リクルート面での影響も大きい。実際、MPSの参加メンバーが同社に就職したケースもあるという。岡山南高校出身でなくても、こうした企業姿勢を知り、関心を持つてくれる学生も多い。

さらに地元企業との連携を深めるきっかけにもなっている。デニム地のバスガイド制服づくりでは他社にも協力を求めた。もともと意識はあつたが、プロジェクトを通じて距離感が縮まったという。2024年度のMPSでは一般社団法人M.A.S.C.(航空宇宙の産業クラスター)を目指す倉敷市水島地域の企業群と連携し、「空飛ぶクルマ」チームのユニフォームをつくる予定だ。

今後も生徒の視点やアイデアを取り入れたモノづくりに挑戦していくと同時に、こうした学校との取り組みを通して、地域企業との連携による地域活性化など新たな原動力になることを目指している。

※2 産業クラスター…限られた地域に集まる産学官が競争、協力して技術革新を重ね、産業育成と地域振興のために協力する状態



岡山南高校の生徒が開発に関わり、2024年度より同校で導入されたバリエーション豊富な新制服

写真提供/菅公学生服株式会社

生徒とのモノづくりを通じた キャリア教育支援と地域活性化

菅公学生服株式会社 《岡山市》

岡山県の主要産業である繊維・服飾業をリードし全国展開する菅公学生服株式会社。子どもたちと学校を取り巻くさまざまな社会課題に向き合う同社は、岡山県立岡山南高等学校との連携プロジェクトで生徒と共に制服の開発を行ってきた。2024年度に導入された多様性に対応する新制服も注目されている。

文/藤沢 享乃

2014年度から続く 岡山南高校とのプロジェクト

学生向け衣料ブランドを展開する菅公学生服株式会社(以下、カンコー)は、2014年度より岡山県立岡山南高等学校服飾デザイン科主催の「産学連携実学体験プロジェクト(MPS)」の連携企業としてキャリア教育支援を行っている。繊維・服飾業について専門的に学ぶ生徒たちのキャリアアップや地域産業の活性化につなげようと始まったもので、今年で11年目を迎える。

毎年、同校の教師とカンコー担当者によりチームが設定され、生徒約40名が8チームに分かれてアイデアを提出。選考会で選ばれた案を実際に製作し、ファッションショー形式で披露目される。制服の廃材を利用した災害用グッズや、県特産品のデニム地を使ったバスガイド制服など、毎年ユニークな作品が発表され話題になっている。

2021年度の企画「セーラー服に合うベストパンツコーデを考えよう」では、多様性などに配慮したスラックスと、それを着用する生徒たちが学校生活をより快適に過ごせるようカー

※1 MPS…MINAMI PRACTICAL SCIENCE PROJECTの略

デジタル技術を生かし、学生との共創で地域課題を解決

「デジタル技術を生かし、学生との共創で地域課題を解決」

「デジタル技術を生かし、学生との共創で地域課題を解決」をテーマに、デジタル技術で解決を図る、会員制コミュニティ「デジタル for YAMAGUCHI」。発足以来、会員同士のさまざまな共創プロジェクトを推進し、学生との協働による事例も増えている。

寄せられた課題を会員と共に解決

「デジタル for YAMAGUCHI」(以下、デジテック)は、デジタル技術を活用し、山口県の地域課題の解決や新たな価値創造に持続的に取り組む官民連携の会員制コミュニティとして2021(令和3)年6月に発足し、現在会員は個人1035人、法人198社を数える(2024年6月現在)。

「会員から寄せられた課題について、デジタル技術やアイデアを持った会員が一緒に考え解決していく数々の共創プロジェクトを展開しています」と運営事務局を務める山口県デジタル政策課の永岡慎也さんは説明する。これまで

に、サッカークラブ・レノファ山口の試合時の駐車場混雑や農耕地の獣害についてデジタル技術で現状を把握し、解決策を講じるなどの共創プロジェクトを進めてきた。デジテックがプラットフォームとなり、各課題に適した会員をマッチングさせ、解決への協働を支援している。

徳山高専の学生との共創でWebサイトを開発

学生が参加したプロジェクトの一つがNPO法人フードバンク山口の「ありがとうWebサイトプロジェクト」だ。フードバンク山口は、企業や農家、個人の余剰食品を食の支援を必要とする施設・団体に無償提供しているが、

「食品の受け取り側から寄贈者側へ感謝の声が届きにくい」といった悩みがあり、デジテックのサイトに課題として掲載した。デジテックの運営サポートを担当する、会員の原田哲也さん(株式会社スオウ代表取締役)は、フードバンク山口から聞き取りを重ね、誰もが気軽に使えるLINE投稿システムを備えたWebサイトの開発を提案。会員の徳山工業高等専門学校に対しプロジェクトに協力してくれる学生への声かけを依頼し、同じく会員の株式会社SolarusにはWebサイトのデザイン協力を仰いだ。デジタル技術を得意とする会員は多数いるが、「若い世代が地域の現場で実践力を養うことは、将来にわたる地域への還元につながる

と思いました」と原田さんは話す。後進の育成も重視し、学生との共創を目指した。学生に実践の場を提供したいと考えていた徳山高専情報電子工学科の宮崎亮一准教授が早速学生に声をかけたところ、単位取得に関わらないものの3人が手を挙げた。当時3年生だった上津原和弘さん、信友玲汰さん、松村和樹さんは「学んだ知識や技術を使って社会に役立つことをしたい」という思いから、立候補したという。

学びが地域社会に役立つ 心遣えを実感

プロジェクトは2022(令和4)年

12月からスタートし、メンバーはオンライン会議でゼロからの開発を始めた。「当初1〜2回でパソコン環境構築や共同開発のための仕組みづくりを行った後、3人の個性に合わせてLINE担当1名、Web担当2名に役割分担し、二つの開発を同時進行させました」と原田さん。内容は、LINEによる写真や文字の入力を促し、そのデータ

をWeb上に掲載するシステムと、デザイン会社の協力を受けたWebサイト全体の開発だ。完成すれば、現場での食品の利用状況や感謝の声を利用者側から手軽に寄贈者側に伝えられるようになり、離れていた両者をつなぐことで、互いに意識し合うことが可能となる。3週間に1回のオンライン会議で学生には「次回までにこのページを作って」といった宿題が与えられ、次の会議で出来栄を確認。修正や改善をして次の段階に進むという作業を繰り返し、LINE投稿システムとWebサイトを構築していった。

高専生にとってデジタル技術は学び

続けてきた身近な知識だったが、LINE担当の上津原さんは「誰にでも簡単に使える仕組みをつくる厳しさを実感しました。自分が作ったシステムの改善が必要な箇所を知ることができた

のも良かったです」と話す。Web担当の信友さんは「原田さんとデザイナーと自分たち、3者の意見が一致しないと次に進めない。複数人で開発していく難しさを実感しました」と同じく松村さんは「途中で細かな問題が次々と生じることに驚き、一つひとつクリアしていくことが予想以上に大変でした」と苦労を振り返る。

彼らを見守ってきた宮崎さんは「学業や部活と両立させながら、チームで開発を進めることへの責任感や、高専での学びが地域社会に役立つ手応えを間接的にでも感じ取ったようで、教育効果は絶大でした」と満足げだ。

ニーズとシーズのマッチングに期待

フードバンク山口の「ありがとうWebsite」は2023(令和5)年11

月に完成し、供用開始に合わせて同年12月に子ども食堂などの交流会で説明を行った。「プレゼンも貴重な経験になりました」と学生3人は達成感に満ちた面持ちだ。フードバンク山口や利用者からは「簡単に投稿できる」「きれいなサイトでうれしい」「食品の授受の確認や感情の交流ができて温かい気持ちになった」などの感想が寄せられている。デジテックでは今後も、積極的に学生との協働によるプロジェクトを創出したい考えだ。「教育現場で把握しづらい地域の課題にうまく学生が力を貸せるように、ニーズとシーズのふさわしいマッチングを願っています」と宮崎さん。地域課題を可視化し、さまざまな立場の会員が携わること新たな共創が生まれることが今後も期待される。

フードバンク山口×徳山高専 ありがとうWebサイトプロジェクト

利用者の「ありがとう」の声を寄贈者に届ける記事投稿システムの開発

食品受取団体がLINE上で
①画像 ②タイトル ③本文
を入力→投稿

フードバンク事務局で承認後Webサイトに掲載

「ありがとうWebsite」
https://thankyou.fbyamaguchi.org/



1 2023年12月1日、完成したWebサイトの公開に際し、周南地域子ども応援連絡協議会の参加・連携団体(子ども食堂など)の関係者に対する説明会を行った

2 説明を行う徳山高専の開発メンバー3名
写真提供/「デジテック for YAMAGUCHI」運営事務局



左から松村和樹さん、上津原和弘さん、信友玲汰さん(現在5年生)

「デジテック for YAMAGUCHI」運営事務局
☎083-921-0010
https://digitech-ymg.org/



ばばのプロジェクトは、駄菓子販売を通じて多世代間で交流し、地域コミュニティの再興に取り組み、現在は清水さんの後輩たちが引き継いでいる。清水さんは地域の人と交流する中で、困っていることを口に出せない人が大勢いることや、さまざまな地域課題があることを知った。より幅広い活動をしたいと考えていたところ、そのタイミングと

COCON開設のきっかけとなったのは、清水さんが大学1年時に設立した学生団体「ばばのプロジェクト」での活動だった。同団体は、COCON同様、地域貢献に挑戦する学生の課外活動を支援する鳥取大学の事業「Small CORE Project」を活用して設立された。この事業では活動資金を交付するほか、行政の補助金活用のアドバイスなども行っており、活動する学生にとって困ったときに頼れる存在となっている。

大学の課外活動支援事業を活用し、学生団体を設立

か、不要になった子ども服や学用品の回収と無償提供、無料学習塾、地元企業の経営者等を招いて若者を対象に開く「0円スキルアップ講座」などを企画し、地域の幅広い世代がCOCONに集う。



週末の金・土・日曜日にオープンするカフェ風の地域食堂「COCON」。学生たちが考えたおにぎりなどのメニューを高校生以下は無料、大人は250円で食べることができる
写真提供 / COCON

温かく包まれる居場所を地域に創出 多世代間交流を促し、人のつながりを育む

地域食堂「COCON」《鳥取市》

鳥取市の中心市街地にある若桜街道商店街の空き店舗を使って2022（令和4）年にオープンした地域食堂「COCON」。住民との交流を深める中で、地域が抱える課題に気づいた鳥取大学の学生有志が主体となり、NPO法人と共に子どもたちの居場所と交流の場を創出している。

文／倉恒 弘美

**子どもも大人も集まり
交流が生まれる地域食堂**

鳥取市の玄関口、JR鳥取駅から鳥取県庁を結ぶ若桜街道商店街は市内最大のアーケード街で、老舗の個人商店や飲食店が軒を連ねている。その一角の空き店舗を利用して2022年12月に誕生したのが、鳥取大学の現役学生と、NPO法人ふふやが共同で運営する地域食堂「COCON」である。

COCONの営業日は週末の金・土・日曜日の3日間。金曜日の夕方になると、下校した近所の子どもたちが次々とやって来る。販売している駄菓子を選んだり、お喋りをしたり、宿題をしたりと店内にはにぎやかな声で活気づく。

COCONでは支援団体からの物資や補助金を活用しながら、学生たちがメニューを考案して調理・提供しており、高校生以下は無料、大人は250円で食べることができる。COCON代表で同大地域学部4年生の清水愛結さんは「毎回、子どもたちが20人、大人が5人ほど食べに来てくれます。世代を超えて自然と会話が生まれ、一緒に遊ぶなど交流を深めています」と話す。

地域食堂以外にも、クリスマスやバレンタインなど季節のイベントのほ

放課後児童クラブの運営などを行うNPO法人ふふやの設立が重なり、副理事の岩渕壮一郎さんから「一緒に何かできないか」と誘われCOCONが誕生した。COCONは「笑い声が聞こえる地域」を目指し、「待合室」「安心」「社会経験

「交流の場」の四つを居場所像とした。「今こそ地域の皆さんに来ていただきたい

ですが、最初は定期的にオープンできなかつたこともあり、なかなか受け入れてもらえませんでした」と清水さんは

振り返る。当初、地域住民からは「大学生が一過性のボランティアとしてやっていくのだろう」という印象を持たれたようだ。清水さんたちは地域住民の理解を得るために商店街を一軒ずつあいさつして回り、また、SNSなどを通じて子育て世代や学生に発信を続けた。こうした地道な活動が実を結び、今で

は「子どもが成長してもう使わないので、良かったら使ってほしい」と、本やカードゲーム、卓球台など子どもが喜びそうなものを地域住民が寄付してくれる。

**一過性のものにせず
継続できる工夫をこらす**

子どもたちの居場所や、交流の場として地域に親しまれる存在へと成長しているが、課題もある。

「大学生が運営主体となる上で、やはり一番の課題は継続性です。4年間しか在籍しないため、常に大学生を集められる仕組みを考える必要があります」

実際に、メインで活動していた学生が進級して就職活動などで忙しくなったり、考え方の相違でメンバーが一気に抜けてしまったりしたこともあった。このため「何を目的にやっているか」という、団

体の目標や思い描く未来を明確にし、その目標につながるようなイベントを企画するようにしている。地域食堂以外にも、さまざまな企画を催しているのは、地域のためであると同時に、学生にとってもより意味のある活動にしたいからだ。

店名のCOCONはフランス語で「繭」を意味し、さらに日本語の「古今」にも掛けられている。

「温かく包まれる繭のように、みんなが立ち寄ってホッとできる場所にした」と考えています。また、祖父母世代と孫世代の古今をつなぐ架け橋のような場所となり、子どもたちが大人になった時に、ふるさとの懐かしい良い思い出として『帰りたい』と思いつかる場所にしていきたいです」と清水さん。

これからも地域に根差した活動が期待される。



1 2 放課後や夏休み時に子どもたちの居場所にもなっている

3 商店街の人たちの協力を得ながら空き店舗を地域食堂に改修

4 COCONは、県主催の令和4年度「とっとりSDGsアワード」セカンドステップ部門で大賞を受賞した

写真提供 / COCON

COCON代表で鳥取大学地域学部4年生の清水愛結さんと、NPO法人ふふや副理事の岩渕壮一郎さん

地域食堂「COCON」
鳥取市職人町26
☎090-6756-4681
Instagram
@cocon_ibasho.huhuya.9



既存のルールにとらわれず
新時代の温泉津を目指す。
人も企業も守りながら
誰もが居場所のある地域に

有限会社小川商店 代表取締役

小川 知興

(島根県大田市)

profile

小川 知興(おがわ・ともおき)

1975年島根県温泉津町(現・大田市)生まれ。立命館大学を卒業後、1998年に広島県に本社を構える輸入車ディーラーに就職。2002年に退社し、帰郷して有限会社小川商店に入社。常務、専務を経て2015年に代表取締役役に就任し、石油・運輸・飲食・不動産・車販事業等の多角経営を行っている。同社は、厚生労働省の令和5年度「高齢者活躍企業コンテスト」で厚生労働大臣表彰最優秀賞を受賞。従業員数71名(2024年5月現在)。

文/木次 亜紀子 写真撮影/山田 泰三

理念の土台をつくった
幼少期の体験

島根県中部に位置する大田市温泉津町は、その名の通り、温泉のある港町。開湯は1300年前といわれる。昔ながらのたたずまいを残す温泉街には、古民家を活用したカフェやゲストハウスが調和し、歴史ある町並みに新しい表情をくり出している。

そうしたまちづくりに尽力してきたのが、有限会社小川商店の12代目、小川知興社長である。同市にある石見銀山

ランドでも働き始めた。「同級生はゲームやスポーツをして遊んでいる年頃。『小川くんはなんで働いているの?』と言われながら夏も冬も働いた。精神的にもきつかったですね」
3年後には再び家族一緒に暮らせるようになったが、高校に入るまでは1日も休まず働き続けたという。
重伝建地区のまちづくりを率先して推進

その2年後となる2004(平成16)年、温泉津は国の重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建地区)に選定された。しかし、地元では重伝建地区としてのまちづくりに戸惑いの声も上がり、地域全体が具体策を探しあぐねていたという。その時、「誰もやらないなら自分がやる」と手を挙げたのが小川社長だった。
「まずは古民家をリノベーションして、誰もが楽しく過ごせる空間をつくりたい」と提案しました。誰も賛同してくれなかったですけどね」と笑う。歴史あるまちを守りたいという人たちの中には、小川社長の革新的な考え方に難色を示



1 2 重伝建地区の古民家を改修して2004年にオープンした「カフェ&バー路庵」。地酒・地ビールはもちろん、温泉津特産である板ワカメやミスダコのピザをはじめ、厳選された新鮮な地域食材を使用したローカルメニューがそろう

す人も少なくなかった。そこでイベントを開き、来場者にアンケートを依頼し、温泉津に「新しい風」を求める声を約500名分集めた。そして向かったのは、町役場を飛び越えて島根県庁だった。「アンケート結果や自分の思いを伝え、温泉津を外から変えてほしいと協力を仰ぎました。そうして県の助力をもって、町の理解を得ることができたんです」
こうして、重伝建地区の一角にある築100年以上の古民家を改修し、2004年に「カフェ&バー路庵」をオープンした。同地区の保存修理事業の再生第一号となる店舗だった。

第三者承継支援で
地域の存続を目指す

小川社長の勢いはこれにとどまらず、その後も神楽の定期公演を始めた。企業の協賛が減って開催が危ぶまれていた夏祭りを、内容を充実させて入場料を取らな形に変えて来場者を増やしたりと、これまでにない視点でまちづくりに着手していった。

「逆風は相変わらず吹き続けました。が、若く血気盛んな頃だったので闘い続けました」と笑いながら振り返る。2015(平成27)年に社長に就任した後もリーダーシップを発揮し、温泉津まちづくり協議会副会長や温泉津温泉夏祭りの実働部隊を務める傍ら、温泉津

で起業したい人を支援してきた。なぜ地域のことにそこまで力を注げるのか。「企業として一人勝ちしたって、地域が存続しなければ意味がない。地域全体で生き残る術をつくって人口の流出を防ぐ、その仕組みづくりが大切だと考えています」
その思いが現れているのが、2014(平成26)年に開始した同社の「第三者承継支援」である。後継者がいない企業に対して、第三者に事業を引き継がせることで廃業を回避させる手法で、同社では自動車整備やITなど、これまで5件の事業承継を行ってきた。後継者問題は今や日本全体の課題ではあるが、地方においてはさらに深刻さを増す。
「企業が一つなくなれば、従業員とその家族が地域に残る理由がなくなり、人口減少に拍車がかかるわけです」
小川社長はそうした危機感を大学時代から感じていた。授業で人口統計学を学んだ際、温泉津の行く末も数字から感じ取れた。地方の集落の消滅を防ぐためには、企業や実業家が協力し合って地域の事業を存続させるべきという構想を卒業論文にまとめている。
「みんなの居場所を残していくことがそが地域にいるわれわれの最大のミッション。そういう自分の思いや情熱をぶつける場所が企業だけでは消化できないので、地域のために実践することで発

散しているんだと思います」

地域課題と高齢者の雇用問題を同時に解決

「みんなの居場所を残す」という点で、小川商店が注力している取り組みの一つが高齢者雇用促進だ。第三者承継支援で企業を買収したことが、取り組みのきっかけとなった。

「従業員の平均年齢を考えたとき、10年後や定年以降にも彼らが活躍できる場をどうつくっていくか、どうやったら会社に残ってくれるのかを考えました。そこで、例えばスクールバスの担い手不足など行政が抱えている課題と一緒に解決できないかと思っただけです」

その提案を行政に持ちかけたところ



- 3 担い手不足であったスクールバスの運行業務から保育園の砂場の補修作業まで、地域の困り事の解決に力を発揮する社員たち
- 4 高齢者がいきいきと働ける職場づくりの取り組みが評価され、令和5年度「高齢者活躍企業コンテスト」において厚生労働大臣表彰最優秀賞を受賞した
- 5 温泉津ふれあい館内部には1階がライダーズハウス、2階がコワーキングスペースという空間が広がる。1階奥の宿泊施設「ミギオク」ではバイク愛好家たちが泊まりできる

写真提供/3~5 有限会社小川商店

載され、全国から注目された。

「みんないつかは高齢者という立場になるのに、年を取ったら働けないというよくなやり方が残っている。その考え方を体を変えないと絶対に生き残れない。エイジレス的な世界観をみんなで作っていくには、まだまだ地域の担い手はいるわけです。それに僕がやっていることって全然お金がかからないんですよ。考え方を変えればいいだけ。ない制度はつくればいいだけ。それで地域がちよっとでも変わればいいなと思っています」

そうした柔軟な発想やバイタリテイは、小学生の時の体験が源になっているという。

「間違いなくそれが僕の原点です。大変だったけど、あれがなかったら今の僕は



ないと思います」

幼い頃から労働の大変さを肌身で感じ、身内からも事業に対する覚悟や厳しさをさまざまな形で教えられてきた。時代を読み、将来を見据え、地域と共に生き残るという精神はそうした経験から培われた。

2022（令和4）年には、地元有志による一般社団法人YILABと共同運営している「温泉津ふれあい館」に、ライダー用の簡易宿泊所とコワーキングスペースをオープンした。多角経営のリスクを恐れず、小川社長はまい進し続けている。

「二兎を追う者は一兎をも得ず」というのは昔の話。これからの時代、三兎でも四兎でも追ったるわ！って思っています」

力強く言い切るその言葉には、小川商店がある限り温泉津は大丈夫、と思わせてくれるパワーがあった。



有限会社小川商店
鳥根県大田市温泉津町温泉津口65
☎0855-65-2636
https://www.t-ogawa.com/

木次 亜紀子（こつき あきこ）
鳥根県出身。観光プロモーション業務、広告会社勤務を経てフリーライターに。山陰の情勢や出版物を中心に、取材・執筆・編集業務を手掛けている。

奇跡の品種改良と逆転の発想による袋方式で屋上緑化に革命

株式会社フジタ 《鳥取県若美町》

文/角田治 写真撮影/山田真実

2023（令和5）年の夏は記録的な暑さが続き、真夏日と猛暑日が連日観測され、各地で過去最多を更新した。世界気象機関（WMO）は、同年の世界の平均気温は観測史上最も高かったと発表した。記録更新の暑い夏はこれからも続きそうだ。

気候変動への対策が急務となる今、株式会社フジタは、温室効果ガス抑制につながる緑化事業の分野で注目を集めている。梨農家、切り花栽培、植物園の経営を経て、多肉植物による緑化事業へと至った同社の歩みは、挑戦の連続だった。

水やりのいらぬ多肉植物で緑化事業に参入

1988（昭和63）年に創業した

同社の緑化事業への取り組みが始まったのは、京都議定書が採択された1997（平成9）年で、現社長の藤田豊博氏の父である初代社長の故・道明氏の発案だった。

当時、屋上や道路などのコンクリート面の緑化といえば芝が主流だったが、水やりや除草剤の欠かせない芝生緑化に、道明氏は大きな疑問を感じていた。屋上に水を汲み上げるためにエネルギーを増やすことになる温室効果ガスを増やすことになるからだ。「環境のことを考えると、いずれ水やりのいらぬ植物が必要になる」と日本各地の海岸を歩き、岩場に生息する植物を集めた。経営していた植物園で寒帯から熱帯まで約2000種の植物を育てた経験がこ

こで生かされた。

まず目を付けた植物が、耐寒性と耐暑性に優れた多肉植物の「セダム」で、その後10年にわたる主力商品となった。もう一つが、高山帯から海岸まであらゆる環境に耐えられる多年草の「キリンソウ」。後に品種改良され、セダムを超える商品「常緑キリンソウ」となる植物がそこにあった。

わずか10年でキリンソウの品種改良を実現

セダムは成長が早く、手間もかからず、何より常緑のため人気商品となった。一方、キリンソウは冬に葉が枯れ、小さな芽（冬至芽）だけになるという難点があった。「セダムは刻んでまいておけば育ちますが、キ

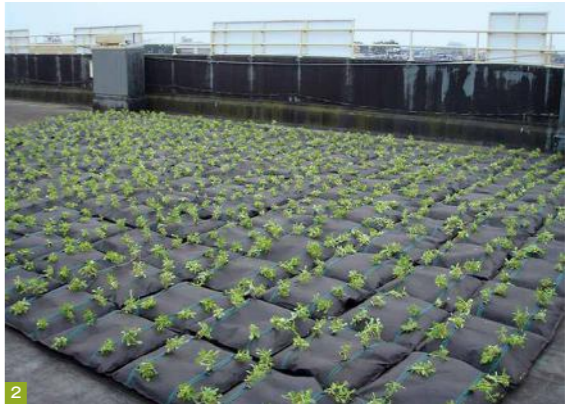


同社が品種登録した常緑キリンソウの「トトリフジタ1号」。雨水が当たるところであれば3~5cmの薄層土壌で育つ。一年を通して緑を保ち、11月末~12月ごろに新芽と入れ替わる

リンソウは1本ずつ挿し木で育てます」と豊博氏は説明する。キリンソウの弱点を克服するための品種改良が道明氏の手により始まった。

品種改良とは、いろいろな性質の中から、優れたものを選ぶ選択と、異なる遺伝子の交配を繰り返して、役に立つ品種を残すことだが、そうたやすくはなく、突然変異という偶然が必要なこともある。それを道明氏は10年でやってのけた。

「種苗会社の研究員でも入社から退



1 特許を取得した常緑キリンソウ袋方式®は、50cm×50cmの不織布製の袋に8kg(乾燥時。含水時は13kg)の専用培土を充填したもの。ファスナーを開けて1袋につき6本の常緑キリンソウの苗を植え入れる
2 常緑キリンソウ袋方式®を置き、苗を植えれば設置完了。押さえ金物などが不要で、簡単に設置できる
3 株が成長し、茎から芽が生えて隙間がないほど成長した常緑キリンソウ
写真提供 / 株式会社フジタ

職までの40年で、新品種を一つ生み出せるかどうかの世界。最後は奇跡が起こったのでしよう」と豊博氏。こうして常緑キリンソウが生まれ、「トットリフジタ1号」の名で2007(平成19)年に品種登録された。

**逆転の発想で
屋上緑化の弱点を克服**

同社の実績は植物だけではない。土の流失を防ぎ、雑草をなくし、持ち運びのできる簡単な緑化システムを開発したことがある。屋上緑化は、土を敷いた花壇や、

土を入れたトレーに植物を植えるのが一般的だが、工事も大がかりで、工期も長くなりがちである。しかし、同社が開発した「常緑キリンソウ袋方式®」は、防草シートで作った袋に土を入れて運び、それに常緑キリンソウを直接植える。運搬用の袋をそのまま土の容器にすることで、雨水は通しても土は流れない。しかも、雑草が生えず、土の量も抑えられる。こうして従来の屋上緑化の弱点を克服した。

もともと、袋方式が現在の形に落ち着くまでには、試行錯誤があった。初めは袋にカッターナイフで穴を開

け、そこにキリンソウを植えていたが、それだと大きさにばらつきが出て、切り過ぎて穴が大きくなると土が流れ出てしまう。これを解決するためさまざまな方法を試した結果、ファスナーを使用することが最適だと分かった。

それにはクリアしなければならぬ問題があった。土を入れた袋に6本のキリンソウを植えるには、1本のファスナーに6個のスライダー(引き手)が必要だが、そんなファスナーは世の中になかった。そこで豊博氏はファスナー製造の大手・YKK株式会社に飛び込んだ。相談を受けたYKKは

「その頃、屋上緑化は、芝、セダム、コケ類で競い合っていました。夏の夏、常緑キリンソウ以外の多くは脱落しました。2010年は、一つの転機でした」

そして、2015(平成27)年、国連総会で採択された持続可能な開発目標(SDGs)により、環境への配慮は社会的な課題となり、ますます関心が高まっていった。しかし、開発事業者への緑化システムの納品が主力事業だった同社は、屋上緑化を採用したい企業や個人に直接アプローチする方法を持ち合わせておらず、営業面では苦戦が続いた。

2018(平成30)年、西日本豪

雨に代表される記録的な大雨により、屋上緑化も危機にさらされた。豪雨により土が流れ、植物ごと流失した場所も少なくなかったが、袋方式はこのピンチにも耐えた。袋に入っているため土が流れ出ることもなく、ほとんど被害がなかったのだ。想定外の猛暑と豪雨は、同社の常緑キリンソウと袋方式が優れていることを証明し、次第に注目され始めた。

こうした優れた特性が認められ、2023年、公益社団法人発明協会が主催する令和5年度「中国地方発明表彰」で特許庁長官賞を受賞した。鳥取県内企業の同賞受賞は平成23年度以来12年ぶりとなった。

**環境への関心の高まりで
屋上緑化の機運が高まる**

2015年の国連気候変動枠組条約締約国会議(COP21)で採択されたパリ協定、2020(令和2)年に日本政府が掲げた2050年カーボンニュートラル宣言をはじめ、環境への配慮は社会全体の課題となり、都市緑地の保全や緑化に関する法律である「都市緑地法」の改正(2024年)により、屋上や敷地の緑化の流れは、今後ますます進むと考えられている。この潮流に乗るよう、トヨタや、パナソニックなど大手企業が屋上および敷地の緑化を次々と進めており、フジタも2024年度、大手メーカーの1万㎡に及ぶ全面屋上緑化を受注している。

「環境問題への取り組みには、ぜひ協力したい」と製造に乗り出し、一気に開発が進んだ。袋を用いたこのシステムは「常緑キリンソウ袋方式®」として特許を取得し、量産態勢への道が開けた。

この袋方式の誕生は、納品用に使った袋を何枚も廃棄することに「ずっと疑問を感じていた」という豊博氏の逆転の発想による。エコバッグを使ってレジ袋を削減するアイデアと似ているが、このシステムを導入したのは、レジ袋有料化が始まる10年以上前のことだ。

**記録的な猛暑に耐えた
常緑キリンソウ**

2010(平成22)年夏、日本列島は記録的な猛暑に少雨が重なり、屋上緑化に異変が起こった。日照りが続いたため、芝をはじめ、暑さに強いセダムまで次々と枯れてしまったのだ。

しかし、セダムのピンチは、常緑キリンソウを持つ同社にとってはチャンスでもあった。常緑キリンソウは最低限の水でも生きられる上に、50℃の暑さからマイナス30℃の極寒まで耐えられるため、この猛暑を乗り越えることができた。

の大きな足がかりであり、その視線は海外へも向けられている。

大地氏は大学が休みになれば地元に戻り、農園で植物に触れ、土にまみれている。これは「土づくりと栽培の現場を知ることが緑化システムを学ぶ原点」と話す2代目社長・豊博氏の哲学であり、植物と共に生きた初代社長・道明氏の生き方そのものといえる。

角田 治(つのだおさむ)
1965年鳥取県生まれ。フリーライター、エディター、グラフィックデザイナー。広告代理店3社と編集会社を経てフリーランス。



株式会社フジタの藤田豊博社長(右)と息子の大地氏。大地氏は同社の緑化システムを売る販売会社を設立し、営業を担っている

植物の生態に精通した道明氏の奇跡の品種改良から、逆転の発想による現社長の袋方式の緑化システムの開発という、親子2代の物語には続きがある。現社長の息子・大地氏は設立資金を自力で調達し、大学1年生の時に、フジタの緑化システムを売る販売会社を設立した。首都圏を拠点とする大地氏は、営業力で後れを取るフジタにとっては県外進出へ



株式会社フジタ
鳥取県若美郡岩美町岩常360
☎0857-72-0087
https://fujita-pp.com/

※1 1997年に京都市で開かれた温暖化防止のための国際会議(国連気候変動枠組条約締約国会議)で取り決められた国際協定。先進国全体で温室効果ガスを2008年から2012年の間に、1990年比で約5%削減することが目標として掲げられた
※2 要件を満たす植物の新品種を農林水産省に登録すると、育成した者に「育成者権」が付与され、知的財産として保護される

祭りを通じて 人と地域のゆるやかな 関係を育む

大イノコ祭りを支える市民の会 副会長
石原悠一 《広島市》

広島市中心部の繁華街にある公園で毎年11月、多くの来場者を集める「大イノコ祭り」が開催されている。総合演出・監修を担当するのが、ライブペインティングやボディペインティングなどのアーティストとして活躍する石原悠一さんだ。祭りを通じて、幅広い人々が「ゆるく」つながる地域づくりに力を注いでいる。

文／入江 太日利
写真撮影／大野 方裕

profile

石原 悠一
（いしはら・ゆういち）

1982年生まれ。広島市出身。特別支援学校の教諭を経て、アーティストに。ライブペインティングパフォーマンスや壁画制作、ボディペインティングなど、国内外で作品を発表している。さまざまなジャンルの表現者が集い、即興的な表現を行うイベント「Blue lab.HIROSHIMA」を主催したほか、子どもが自由に描く表現を楽しむ活動「楽描キッズ」なども展開。2015年から大イノコ祭りの総合演出・監修を務める。



地域に根差した祭りに アートを融合させ深化

広島平和記念公園から東に577m伸び、多くの人でにぎわう「広島本通商店街」（広島市中区）。そこから約200m南に位置する袋町公園では、毎年11月の2日間、大イノコ祭りが開かれている。その原型は、古くから広島各地で行われてきた「亥の子祭り」だ。

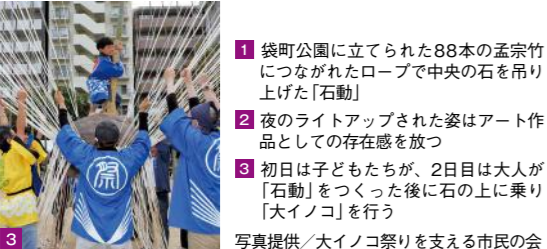
「亥の子、亥の子、亥の子餅ついて、繁盛せい、繁盛せい」と歌いながら子どもたちが縄を結んだ石で地面を打って地域を回り、商売繁盛や子孫繁栄、五穀豊穡を願うもので、旧広島市内を中心に、広島県の他地域や愛媛県、九

州の一部に残るとされる。

その土着的な祭りにアートの要素を加え、多様な人が交わる祭りに発展させたのが大イノコ祭りである。長さ13mの孟宗竹88本の先端と、重さ約1.5トンの巨石をロープで結び、竹の張力で石を宙に浮かせる「石動」と名付けられた祭りのシンボルは、来場者をつくり上げるインスタレーション（空間芸術）だ。参加者は掛け声とともにロープを揺すり、巨石で地面を繰り返して「大イノコ」を行う。

お礼やあいさつを大切に コミュニケーションを再構築

1990年代初め、袋町公園周辺の商店主らを中心に、現在の大イノコ



1 袋町公園に立てられた88本の孟宗竹につなげたロープで中央の石を吊り上げた「石動」
2 夜のライトアップされた姿はアート作品としての存在感を放つ
3 初日は子どもたちが、2日目は大人が「石動」をつくった後に石の上に乗って「大イノコ」を行う
写真提供／大イノコ祭りを支える市民の会

祭りのもととなる企画が実施されていたが、資金難から90年代後半に途絶える。その後、市民と商店街が連携してまちづくりを行うNPO法人セトラひろしまが中心となり、2013（平成25）年に復活させた。アトイメントも手掛ける同法人の中心的存在だった石丸良道氏の周りに石原さんら若手のアーティストたちが集い、つながりが生まれていたことが祭りを再興する後押しとなった。翌年までの2年間は商店街振興の助成金を活用して運営したが、2015（平成27）年からは新たに設立された「大イノコ祭りを支える市民の会」が主催者となり、88本の竹の竹主協賛を募って資金を集め運営されている。この会には、地域の商店街やNPO法人、学校関係者をはじめとより、石工や庭師、アーティスト、金融関係者、福祉関係者など広島県内外からさまざまな専門性を持つ人たちがメンバーとして名を連ねる。

「イベントだと嫌がる人も、お祭りだと納得してくれるんです。日本人の持つ「祭り」への思いを感じ、そこに働きかけることで多くの人をつないでいくことを目指しました」
陰の努力は他にもある。竹主へのあいさつ文や協賛のお礼状、報告書など、祭り前後の事務作業は膨大だ。「大変ですけど、ひと昔前までは面倒なことを大切にしていたと思うんです。例えば年賀状や盆暮れの付け届けなど、お世話になった方に、自分のお金や時間を削ってお礼する。一見、無駄にも思えるけど、みんなが幸せに生きていくための知恵でもあります。メールで添付資料を開いてくださいと伝えられる時代ですけど、きちんと声をかける。頭を下げる。というのは人とのつながりを構築するにあたって大事なことです。そういう泥くさいつながりをずっとやっていくと、田畑が耕されるみたいに、次の芽も出やすくなるんだらうなという気がしています」



中川酒造株式会社
鳥取市立川町2丁目305
☎0857-24-9330
<https://nakagawa-shuzo.com/>
料理協力：酒処わさび
鳥取市末広温泉町361



いなば鶴 純米大吟醸 強力

ハタハタの塩焼きとしゃぶしゃぶ

〔鳥取市〕

鳥取城がそびえる久松山山系の麓、鳥取市立川町で、中川酒造は1828（文政11）年に創業した。出雲系杜氏が裏山の弱軟水で仕込む酒は、柔らかな口当たりの良さが評判だ。趣ある酒蔵は大正時代の建造で同市出身の漫画家・谷口ジロー氏の『父の暦』作中の造り酒屋のモデルとなった。

大正生まれの銘酒「福寿海」が長く愛されるが、平成初期、7代目の中川盛雄さんが強力という酒造好適米で醸した「いなば鶴」を発売した。それは、鳥取県の酒造業界の歴史を変える酒となった。

強力は、明治時代に在来品種から選抜育成され県の奨励品種となるまで生産が行われたが、背丈が高く育ち倒れやすいなどの理由で昭和の半ばに栽培が絶え、姿を消した。「真の地酒」を追求していた中川さんはそれを知り大捜索に乗り出す。人脈を頼りに東奔西走した結果、奇跡的に一握りの原種保管された種籾を手に入れ地元農家に持ち込み、どうか栽培を引き受けてもらった。

探し始めてから4年後の1990（平成2）年2月、ついに上槽が実現した。強力は、有名な酒米・山田錦の祖先雄町のルーツともいわれ、米を磨き上げて高精白にしても米のうま味がしつ

かりと生きる味わいに仕上がった。程なく強力は県下に普及し鳥取の産地限定酒米として地位を築き、今では県内18の酒蔵の約半数で採用されている。

今回紹介するのは、中川酒造が初めて強力で仕込んだ酒「いなば鶴 純米大吟醸 強力」だ。全国新酒鑑評会で二度金賞に輝いた、中川酒造のいわば「顔」である。濃醇でどっしりとした飲み応えがあり、日本海の幸との相性は抜群だ。春が旬のハタハタを薄くおろし、しゃぶしゃぶでいただく。カツオと昆布から取った出汁に10秒ほどぐらせば身が白く反ってきたら薬味と共にポン酢でいただく。身の締まった新鮮なハタハタと、力強い酒の風味が互いに引き立て合い、豊かなハーモニーを奏でる。おすすめは冷酒だが、燗上がりもするので気分に合わせて楽しめる。

中川さんは2021（令和3）年、惜しまれながら鬼籍に入った。現在は妻の彰子さんと息子の雄翔さんが志を継ぎ、職人、職員一体で酒造りに励んでいる。「目指すのは、心に残るお酒造り。人と人をつなぐお酒でありたいと願っています」と彰子さん。大勢の協力によみがえった強力の酒を飲む人々の笑顔が、これからも広がってゆくことだろう。



4 大イノコ祭りの初日、子どもたちは「亥の子巡行」で広島本通商店街などを回る
5 祭り会場には「竹遊び☆ひろば」が設けられ、地域の名人に教わりながら竹細工をつくることもできる
6 市民の会では若い世代と共に、祭りで使用する竹を切り出した竹林を整備している
7 広島本通近くの広場で2018年まで開催したイベント「Blue lab. HIROSHIMA」でライブペインティングパフォーマンスを行う石原さん

写真提供/大イノコ祭りを支える市民の会

アートを制作するように祭りをコーディネート

また、広島市中心部の広場で、自身のライブペインティングをはじめとしたさまざまなアーティストによるストリートパフォーマンスイベントを開催し、アートを多くの人に身近に感じてもらえるよう活動してきた石原さん。「祭りを通じた地域づくりは、ライブペインティングで『どの絵の具をどのくらいの量でどう塗ると、どういう作品になる』と考えるのと似ていて、『どういう要素を持った人をどのように混ぜ合わせて、こうしたら地域がこうなる』という制作作業のような感じが、私にとってはアート作品をつくり上げ

る感覚に近いんです」と石原さんは作品づくりとまちづくりを重ね、さらに続けた。

「地域の祭りは関わる一人ひとりが得意なことを持ち寄って輝き、楽しめる場を提供できる器。みんなで楽しく騒ぐハレの日であるとともに、地域自治の重要な機能でもあります。顔を合わせて協力したり、折り合いをつけたり、世代間で交流したりと、続けていくことで補い合う関係が構築され、災害時にも対応しやすくなると思います」

近年、町内会などの地域組織が形骸化し、地域から祭りが姿を消しつつある。少子高齢化や価値観の多様化も祭りの減少に拍車をかける。

「広島市中心部はバブル崩壊以降、ドー

人をつなぎ地域の力となる大イノコ祭りのこれから

ナツ化現象が進み、居住者が減った。子ども会や町内会が機能しにくくなり、地域の行事が廃れて、伝統や技術が継承されなくなりました」と石原さん。

「担い手として関わってもいいし、もちろん来て楽しむだけでもいいです」地域コミュニティの希薄化が深刻さを増す今、ゆるくつながって地域の力となる祭りの存在は貴重だ。

2023（令和5）年の大イノコ祭りには、延べ180人が運営に携わり、2日間で約9500人が来場した。現在、2024（令和6）年11月の開催準備が進んでいる。

「大イノコ祭りに集まった有志を振り分けて、地域でも亥の子祭りができた」と考えてきた石原さんが現在力を入れているのが、袋町近隣を回って行う亥の子祭り「亥の子巡行」だ。すでに、「広島本通商店街」や「広島銀座街商店街」で実施され、次回は「中央通り商店街」へも巡行する見込みだ。

また、年々協力の輪は広がり、地域のお店と大学生の共創による和菓子・洋菓子の販売や、子どもの竹細工体験コーナーなど、祭りの内容は充実してきた。竹を伐採した竹林の整備や、手

入れの一環としての竹炭づくりも市民の会で若い世代と共に進んでいる。復活から10年以上が経過した。

「初期に参加していた子どもたちが成人したり、地域の集まりが活発になったり、参加者の変化や成長が感じられ、祭りとして成熟してきたことを感じます。同時に地域のコミュニティづくりにも祭りがどう機能するかが明確になってきました」と石原さんは話す。参加者同士で「顔見知り」「あのととき酒を酌み交わした」など、人と人、地域と地域が、ゆったりと楽しみながらつながり広がっているのだという。

人をつなぎ、地域の力となる祭りとして継承されていくよう、次世代へのバトンタッチも見据えながら、石原さんのコミュニティづくりは続く。

Writer

入江 太日利（はりえたかとし）
1970年福岡県生まれ。大学卒業後、業界新聞、経済誌などを経てフリーライターに。取材記事を幅広く執筆することにも、写真撮影なども手掛けている。

大イノコ祭りを支える市民の会
広島市中区本通1-6
ミヤタキビル4F
☎082-545-7611
<http://www.cetra.jp/oinoko/>

横仙歌舞伎

地元の人々が演じる地歌舞伎として江戸時代から続いてきた横仙歌舞伎。次の世代へとつなぐべく、町独自の専門職員制度やこども歌舞伎教室などにより、幅広い世代を取り込んでいる。

(岡山県奈義町)



- 1 「こども歌舞伎教室」では舞台に向け、年25回程度練習を行う。横仙歌舞伎は、老若男女問わず誰でも舞台上で活躍するのが昔からの特徴だ
- 2 3 春の公演を行う松神神社の舞台。床下は役者たちの支度部屋となっている
- 4 着付けや化粧、床山(とこやま、髪結い)など、裏方も全て町民が行う
- 5 公演で使用する大道具の準備をする子どもたち
- 6 奈義小学校の総合学習では、3年生全員が稽古をして舞台を踏む
- 7 「こども歌舞伎教室」を経験した高校生を含む保存会メンバー。全体で約60名が在籍している

灯を絶やすことなく 継承された横仙歌舞伎

江戸時代中期以降、大坂や江戸で上演され人気を博した歌舞伎は全国へと広がり、地元の人々が演じる地歌舞伎が各地で生まれた。横仙歌舞伎もその一つで、起源は江戸時代後期にさかのぼる。播州歌舞伎(兵庫県)の興行が行われ、それを観た地元の人々が「自分たちも演じてみたい」と思い、演者へご馳走や寝泊まりを提供する代わりに教えを乞うたのが発端とされる。「横仙」とは山の横という意味で、奈義町一帯を指す古い地名である。横仙歌舞伎は農村の少ない娯楽、そして地域の絆を深める年中行事として披露されてきたが、農村からの若者の流出や映画やテレビ等の普及などにより、徐々に衰退していった。この地域の神社等にあった15もの歌舞伎舞台はその多くが撤去され、現在は松神神社にただ一つ

後、1976(昭和51)年に保存会として再度、同文化財に指定された。

こども歌舞伎教室や 総合学習で面白さを伝える

現在、保存会には、2024(令和6)年春に「こども歌舞伎教室」から移ってきた高校生5名を含め、約60名が在籍している。こども歌舞伎教室は、後継者育成を目的に1996(平成8)年に開講した。開講当初は小中学校に声をかけても参加者はなかなか集まらなかったが、奈義小学校からの依頼で2005(平成17)年から3年生の総合学習のテーマに横仙歌舞伎が取り上げられるようになると、こども歌舞伎教室にも毎年13〜14名が参加するようになったという。

総合学習では、歌舞伎専門職員が指導し、児童が入れ代わり立ち代わりしながら、3年生みんな「百浪五人男」を演じる。歌舞伎専門職員は、町独自の制度から生まれた職員で、1996(平成8)年、2000(平成12)年に1名ずつ採用された。2名は女流義太夫の人間国宝、故・鶴澤友路氏と竹本駒之助氏の下で義太夫・三味線の研修を積み、町役場で業務に勤しむ傍ら、横仙歌舞伎の定期公演にも出演している。その一人である二宮直基さんは、「専門職員を採用するのは、奈義町自体が横仙歌舞伎をそれほど大事にしている決意表明でもあるといえます」と力強く語る。

が残るのみである。この舞台は1846(弘化3)年、付近にあった有元王子権現に建てられ、後に回り舞台へと改造。1921(大正10)年に松神神社境内に移築されたものである。本格的な機能を備えた江戸時代の舞台として、1963(昭和38)年に岡山県重要有形民俗文化財の指定を受けている。

各地の地歌舞伎が姿を消していく中、横仙歌舞伎は技術を継承する故・高森源一氏が中心となり、受け継がれていった。高森氏は私財で衣装やかつらを買いそろえ、各地の地歌舞伎へ貸し出し、役者や三味線弾きを務めながら、自ら演技指導も行った。さらに、町民の意見を取り入れて地域に合った台本も数多く書き残した。

高森氏が1966(昭和41)年に横仙歌舞伎技術保持者として岡山県重要無形民俗文化財の指定を受けると、これを機に横仙歌舞伎保存会が発足。高森氏逝去

全てがそろっているため どこでも演じられる

横仙歌舞伎は例年、春と秋に定期公演を開催しており、春は松神神社歌舞伎舞台を使用する。秋は「大公演」と銘打ち、11月に2日間にわたって催され、この時にはこども歌舞伎教室の舞台も鑑賞できる。その他、依頼があれば、出張公演も行っている。

「歌舞伎の台本があり、かつらも小道具等もある。三味線や語りもできる歌舞伎専門職員がいる。町民は役者だけではなく裏方等にも携わっている。横仙歌舞伎は全部がそろっているのです、どこでも行けます。これが誇りです」と横仙歌舞伎保存会副会長の川本宏和さんは語る。

保存会では、受け継がれた衣装やかつら等の道具類を修理しながら大切に使い、他地域の地歌舞伎の裏方仕事も支援している。横仙歌舞伎だけにとどまらず、地歌舞伎の文化自体を後世に残すべく、日々奔走している。



横仙歌舞伎保存会副会長の川本宏和さん(右)と歌舞伎専門職員の二宮直基さん(左)

横仙歌舞伎保存会
【住所】岡山県勝田郡奈義町豊沢327-1
【代表者】会長 奥正親(奈義町長)
【連絡先】奈義町文化センター
☎0868-36-3034



江戸時代に建てられ、明治時代に木製滑車による直径5.8mの回り舞台に改造、大正時代に松神神社境内に移築された歌舞伎舞台

ハワイへの官約移民の約13・5%が周防大島出身

山口県東部、柳井市と大島大橋で結ばれた周防大島は瀬戸内海で3番目に大きな島だ。夏の海水浴客をはじめ県内外から豊かな自然を求めて訪れる観光客が多く、近年は県外からの移住の増加でも注目される。

この島は明治初期にハワイへ多くの移民を送り出したことでも知られている。当時のハワイ王国と日本政府の間で進められた官約移民では、1885(明治18)年からの9年間で約2万9000人の日本人がハワイへ渡り、うち周防大島出身者は3913人を数えた。その歴史を受け継ぎ、1963(昭和38)年にはハワイ州カウアイ島との姉妹島縁組が締結された。さらに移民の歴史を後世へと伝えていくため1999(平成11)年に開館したのが日本ハワイ移民資料館である。

帰国者が建てた邸宅で移民の歴史と美態を知る

日本ハワイ移民資料館は、大島大橋から約5km、小道を入った石垣の上に立つ本瓦葺きの建物で、明治時代にサンフランシスコに渡り貿易業で成功した福元長右衛門が帰国後の1928(昭和3)年に建てた屋敷だ。

13万5000人の移民データを管理

中でも力を注いだ検索コーナーでは、官約移民に続く私約移民・自由移民も含めた1907(明治40)年までの日本からハワイへの渡航者13万5000人のデータが検索できる。「ハワイからルーツ探しに来られる方も多く、日本語を話せないのに涙ぐむ姿も見られます」と木元館長。ちょうど取材時にハワイからツアー客17名が訪れていた。うち数名に同館のスタッフから書類が手渡される。数日前に申し込んでいた先祖の検索結果だ。真剣に見入り、「私は日系3世。祖父のことを初めて知った」と英語で話した。ハワイからの訪問客はゆっく

ハワイへの移民の歴史を伝え周防大島とハワイの絆を示す



帰国者がハワイから持ち帰った道具や生活用品を展示したコーナー。当時の暮らしがうかがえる

りと時間をかけて観覧し、スタッフは身ぶりを交え、英語で応えていた。蔵を活用したシアタールームでは、ビデオ「海を渡った日本人」が英語版でも視聴でき、移民の歴史が映像から学び取れる。「なぜこの島から多くの移民が出たのか」という素朴な疑問に、木元館長は移民の歴史コーナーの写真を指して「当時の外務大臣・井上馨は山口県出身でしたから、この島での募集に特に力を入れたのです。自然災害などで困窮していた人々は、移民というよりは好条件の出稼ぎで、いずれ戻るといった感覚だったのでしよう。江戸時代から大工や石工、船乗りの出稼ぎが多かった島です」と答えた。さらに「この島とハワイは海でつながっている、

という親近感もあったかもしれない」と当時の島人たちの心情に思いをはせた。

仕送りや寄付により故郷に錦を飾る

移民の中には財を蓄えた者も多く、帰国者が使っていた道具や生活用品からはハイカラな暮らしが伝わってくる。ひととき目を引くグランドピアノは、1932(昭和7)年にホノルルの村人会から町内の三浦小学校に寄付されたものだ。島内の学校や神社などにはハワイで暮らす移民からの寄付が相次いだという。「故郷への貢献は、望郷の念に加え



資料館となっている「旧福元家住宅主屋」は2022年に国の登録有形文化財に指定された



館内には、ホノルルの村人会から寄付されたグランドピアノなどが展示されている写真提供/日本ハワイ移民資料館



依頼していた先祖の情報をじっくりと見るハワイからのツアー客



移住後、自分たちでつくった最初の住まい(上)ホノルル港で汽船を待つ日本人移民たち(1899年頃)(下)写真提供/日本ハワイ移民資料館



ハワイ神話の神々をモチーフにした木彫りのティキ。周防大島町とハワイ・カウアイ島の姉妹島縁組50周年を記念して2012年に製作された写真提供/日本ハワイ移民資料館

館長 木元真琴さん
開館前3~4年間の資料収集から携わり、ハワイにも数回足を運んだ。



日本ハワイ移民資料館
山口県大島郡周防大島町西屋代上片山2144
☎0820-74-4082



「資料館の開設に際して遺族から寄贈された屋敷を再生活用しています」と館長の木元真琴さん。太い梁や一枚ガラスの窓、らせん状の階段などを備え、和洋折衷の生活様式を今に伝えるこの建物の建築費は、現在の価値に換算すると約3億円とされる。国の登録有形文化財にも指定されており、資料館の展示内容だけでなく、建築としても一見の価値がある。資料館には多くの写真パネルが張り巡らされ、さとうきび畑で働く移民たちの表情が見る者に迫ってくる。部屋ごとに「官約移民の歴史」「移民たちの労働と生活」「ハワイとの交流」などのテーマに沿った書物やゆかりの品々が多数展示されている。



当時の日本で帰国者たちの装いは目を引くものだった

※ ハワイ王国と日本との政府間協定書に則って1885年から送り出された移民は「官約移民」、移民事業が政府から民間の会社に移譲された1894年からの移民は「私約移民」、ハワイがアメリカ合衆国に併合された後の1900年以降の移民は「自由移民」と呼ばれた

日名倉山

〈岡山県・兵庫県〉



ベルビル自然公園から山頂へと続く遊歩道の途中、麓の集落が鐘楼越しに一望できる

岡山県北東部の美作市東栗倉地域に位置し、兵庫県との県境にまたがる日名倉山は、氷ノ山後山那岐山国定公園に属する。標高は1047・1mで、岡山県側から見た山容から美作富士と呼ばれる。

奥海札から舗装された道を登ると、40分ほどでベルビル自然公園に出る。凱旋門を思わせる鐘楼が山の中腹にたたずむ姿が印象的だ。鐘楼裏手には10haに及ぶ茅の群生地が広がり、山頂へと続く丸太階段の遊歩道が整備されている。

そのまま遊歩道で山頂を目指すことも可能だが、右手の林道を選ぶと、登山を長く楽しめる。山頂を回り込むようにヒノキ林が続く、やがて奥海越からの登山道に合流する。兵庫県側の見どころである一の丸、二の丸とこぶを順に進むと、いよいよ三の丸（山頂）の三角点に到達



- 2 春に花が咲くミツマタは和紙の原料で、岡山県が生産量日本一を誇る
- 3 山頂の広場には三角点と共に「鎌倉神社」の祠が並ぶ
- 4 志引峠の登山口付近にある「武蔵山牟跡」の石碑

写真提供 / 1 岡山県観光連盟 2~5 美作市



地図制作：磯部 祥行

する。広場からは美作アルプス（後山・舟木山・鍋ヶ谷山・駒の尾山）の峰を連ねた姿が一望できる。帰りは北側ルートを鹿除けの柵沿いに40分ほど下ると、宮本武蔵の姉がとらわれたという「武蔵山牟跡」石碑が残る志引峠の登山口へ到着する。国道と県道を辿れば出発点に戻ることができる。

一日も。百年も。



©「碧い風」VOL.110 2024年7月1日発行

発行人：長谷 雅登 編集人：城市 奈那
 ●企画・発行：中国電力株式会社 地域共創本部
 〒730-8701 広島市中区小町4-33 ☎082(544)2759
 [ホームページ(碧い風)] <https://www.energia.co.jp/eneso/kankoubutsu/wind/index.html>



●編集・制作：株式会社ジェイクリエイト
 〒101-0052 千代田区神田小川町3-7-13 ヴァンサンクビル6F ☎03(6273)7135